

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題 「現代ムスリム知識人の変容と交流」 令和2年度第1回研究会

日時 令和2年10月10日土曜日

午前10時半～午後12時半

場所 Zoomによるオンライン開催

報告

高尾賢一郎（AA研ジュニアフェロー、中東調査会）

「シリア状況説明」

岩倉洸（AA研共同研究員、京都大学）

「アゼルバイジャン状況説明」

和崎聖日（AA研共同研究員、中部大学）

「ウズベキスタン状況説明」

渡邊祥子（AA研共同研究員、JETROアジア経済研究所）

「マグリブ諸国状況説明」

※非公開

本年度は、現代ムスリム知識人像について整理することを目的に、メンバーが順次担当する地域・国の状況を説明する作業に取り組むこととする。この上で、まずはシリア、アゼルバイジャン、ウズベキスタン、マグリブ諸国の事例について報告がなされた。

シリア（高尾報告）については、オスマン帝国崩壊から国民国家シリア誕生に至る過程で見られたウラマー（イスラーム学者）の変遷について、従来の研究で指摘されてきた名家の没落や中産階級の台頭、また列伝（タバカート）を参照しつつ、現在のバアス党体制確立以降、宗教権威に求められてきた役割を、アフマド・クフターロー（1915-2004）やラマダーン・ブーティ（1929-2013）といった事例を元に説明された。

アゼルバイジャン（岩倉報告）については、同国のイスラームが政府組織と、ウラマー組織であるムスリム宗務局による二元的な管理がなされていることの説明を踏まえ、ムスリム知識人と見なされる上でどのような教育を受けてきたかのプロセスが重視されることが

指摘された。そして、彼らを輩出する具体的な教育機関や、カフカース・ムスリム宗務局局長のアッラーフシュクル・パシャザーデ (1949-)、ジュマ・マスジドのイマームであるイルクラル・イブラヒームオグル (1973-) といった、今日の代表的な人物が紹介された。

ウズベキスタン (和崎報告) については、ソ連解体後の代表的なイスラーム学者としてムハンマド =サーディク・ムハンマド =ユースフ (1952-2015) が取り上げられた。報告では、彼のウラマーとしての経歴に加え、その思想の中心として伝えられてきた政治運動の拒否と中道主義が、留学や国外追放期間に海外で出会ったウラマーたちの影響を色濃く受けていたことが説明された。

マグリブ諸国 (渡邊報告) については、アルジェリアの事例を中心に、従来の政治・社会史研究の整理がなされ、具体的に誰が「ムスリム知識人」と見なせるかの検証がなされた。この上で、ローカルな権威であったザーウィヤ (スーフィー教団の修道場)、改革主義の側に立つウラマー協会、世俗教育を受けたハイブリッド、マディーナ渡航者、ムスリム同胞団系という分類で、具体的な人物例が挙げられた。

以上を基に、質疑応答及び議論では、当該社会でムスリム知識人と見なされる要素としてどのようなものがあり、またこれを国家がどのように管理してきた (こなかった) かについて、各事例の詳細が確認された。

(了)